

慶谷壽信先生の学問などについて(2)

吉池孝一 中村雅之

ウェブサイト「古代文字資料館」には現在「長田夏樹学術資料庫」および「豊田五郎学術資料庫」があります。今後、「慶谷壽信学術資料庫」の構築を計画しており、それに先駆け、またそれと歩調をあわせて、慶谷先生の学問などについて短い対談を複数回行い、随時掲載することになりました。

\* \* \* \* \*

中村：今回は慶谷先生との出会いや論文などにおける感想を思いつくままに話したいと思います。吉池さんが最初に慶谷先生と会ったのはいつですか。

吉池：1983年の11月16日です。この日、早稲田大学中国文学会で慶谷先生の報告がありました。早稲田大学の方に誘われて出席すると、題は「有坂秀世博士の学士院賞受賞前後」でした<sup>1</sup>。会場はほぼ満席で（雰囲気におされてそのように記憶しているのかもしれませんが）、居並ぶ大先生の最後尾の隅っこに座りました。慶谷先生は特段の前置きもなく始められ淡々と事実関係を述べておられたような気がします。言語研究に直接係わる話を予想していた私は、このような研究報告もあるのかと、やや困惑をしつつ聞きました。印象に残っていることが一つあります。司会進行を担当した先生が、報告を受けて最後に短いまとめの話をされました。有坂研究の意義についての話です。私は最後のまとめによって、はじめて報告の意味を理解しました。

中村：慶谷先生と言葉は交わさなかったのですか。

吉池：終了後、慶谷先生と、ご関係のお二人と私とでお茶を飲む機会がありました。主にお二人が話をされ、慶谷先生はうなずいておられたという印象が残っています。当時、私は上海の復旦大学に留学し許宝華先生のところで勉強していたのですが1983年には帰国していました。復旦大学の音韻の授業で使用したテキストの話などの後に、どのようなテーマに関心をもっていたかという話題に移りました。そこで、「北宋から金（元好問）の詩の入声の押韻によると、入声韻尾の変化は、前舌主母音を含む音節のほうが、後舌主母音を含む音節よりも、早く起こったようだ」ということを書いたレポートを許先生に提出した

---

<sup>1</sup> 会場は早稲田大学文学部第一会議室。「有坂秀世博士略年譜」が資料として配布された。このときの口頭発表は「有坂博士追悼講演會について」（『中國文學研究』10、1984年）として学術雑誌に掲載された。

話をしました。

中村：入声韻尾の消失の過程と主母音との関係については、慶谷先生も『蒙古字韻』などを資料として論文を書かれていたのではないですか。

吉池：はい。同席していた方もそのことに言及すると、慶谷先生は、二言三言、「そういうこともありました」というような趣旨の話をされましたが、論文の内容に及ぶことはなかったと記憶しています。私は不覚にも、そのときに始めて先行研究として慶谷先生の論文のあることを知りました。

中村：「入声韻尾消失の過程についての一仮説 —— 「蒙古字韻」からのアプローチ」（『名古屋大学文学部研究論集』XXVII、1965年。以下「一仮説」）ですね。手もとの「慶谷壽信先生著述目録」（『人文学報』311、2000年）によると、先生が最初に公表した論文であり、名古屋大学助手（文学部中国文学）の頃の著作となります。

吉池：これは入声韻尾消失の過程において、音節の広狭（音節全体として high, mid, low の別を想定する）が関係するということを仮説として提示したのですが<sup>2</sup>、どのような音節から消失が起こったかというようなことは述べていません。同様なテーマの論文として、「北音入声演変攷」附説（『名古屋大学文学部研究論集』XL、1966年）と「音節構成と音韻変化 —— 湖北方言における入声韻尾消失の過程 ——」（『名古屋大学文学部研究論集』XLIII、1967年）があります。前者は、慎重な表現ながら、狭い音節から変化が起こったとします<sup>3</sup>。後者の結論には二つあるのですが、その内の一つとして「入声韻尾の消失の順序は、・・・入声音節における核母音ないしは核母音を中心とした連続する母音類群の front, central, back ; high, mid, low の別ないしはそのような傾向の差によって決定される、と私は推定する」とあります。これまでの仮説に対して、母音の調音位置の前後が条件として新たに加わりますが、やはり慎重な表現となっています<sup>4</sup>。もっとも、当該論文の8頁では、音節全体が back かつ low のものの入声韻尾の消失が最も遅いとも述べてい

---

<sup>2</sup> 『蒙古字韻』中の旧入声類の韻母は、大きく旧入声韻尾の-k と-t-p の二つ分けられるとする。さらに-kは high syllable と mid syllable と low syllable の三つに分かれ、-t-pはそれぞれ high syllable と non-high syllable の二つに分かれるとする。

<sup>3</sup> 「私は、つぎのように考える。中国語音韻史上（特に中古音から近世音にかけて）狭い音節というものは、概して、音声的に不安定であり、また体系上も不安定であって、従って例外のあらわれる確率も大きい、ばあいによっては、変化のきざしをみることになるのであると。」（14頁）。

<sup>4</sup> 「一仮説」の中でも、front, central, back の別を考慮することが望ましいと述べる。注16では「front, central, back の別は、蒙古字韻のばあいには、それほど有力な条件ではないので活用されていないが、一般に不要であるとは限らないであろう。たとえば、覚・沃・燭韻などのばあいには back という条件があるともみなしうる。」とある。

ます<sup>5</sup>。

中村：1回目の対談で、慶谷先生の研究の柱に「物事の沿革の解明」があるという話ができました。入声韻尾消失過程の研究も「物事の沿革の解明」には違いありませんが、研究人生の出発点の論文が仮説の提示であったというのは意外ですね。

吉池：徹底した調査にもとづく物事の沿革の解明という姿を見ていたわれわれにすれば、仮説の提示というのは、意外といえれば確かに意外です。この三本の論文の後、先生はこのテーマから離れ<sup>6</sup>、敦煌から出土した音韻資料の研究（名古屋大学に提出した修士論文）の公表に向かわれたようです<sup>7</sup>。ふつう最初に公表する論文は卒業論文か修士論文を書き改めたものであらうと思うのですが、そうではなかったわけです。なお、「入声韻尾消失の過程についての一仮説——「蒙古字韻」からのアプローチ」については、言及すべき点がいまひとつあります。この論文のなかで有坂秀世の「入声韻尾消失の過程」（『音声学協会会報』41、1936年）を取り上げていることです。「現代方言の入声韻尾を音声的に観察した結果、入声韻尾の消失過程について綿密な仮説をうちたてたのは、有坂秀世氏の研究であらう」（8頁）として内容を紹介しています。なお、慶谷先生の論文の題は有坂氏の論文の題と類似しており、この類似は意図的なものでしょうから、これによっても有坂論文への傾倒を見て取ることができると言ってよいのではないのでしょうか。

中村：有坂秀世の生涯について追跡調査を開始したのは「有坂秀世博士のこと」（『トンシユエ』5、1993年）によれば、「前史—石塚龍麿から有坂秀世まで—」を執筆した1981年以降のことであるらしく、先生ご自身にお聞きしたところによっても、そのとおりでした。有坂秀世の生涯の調査についてはそのとおりであっても、有坂秀世の学問については「一仮説」をお書きになった1965年前後より深い関心を寄せておられたのでしょうか。

吉池：ところで中村さんは1982年に都立大の中文に学士入学して、1985年からの4年間は大学院でお世話になったとのことですが、慶谷先生に初めて会ったのは学士入学の前後ですか。

---

<sup>5</sup> 「音節全体が back かつ low なる傾向をもつ音節構成が最も安定したもの、つまり、入声韻尾消失が最も遅いものではなかろうかとの想定が可能である。」（8頁）。

<sup>6</sup> その後は『玉篇』巻末に附された「五音聲論」について（『人文学報』140、1980年）において「一仮説」についての言及がなされる。

<sup>7</sup> 修士論文については「「俗務要名林」反切声韻考」（『人文学報』128、1978年）の附記に「本稿および前稿「資料篇」は、Stein 6691v「首楞嚴經音」をあつかった「敦煌出土の音韻資料（上）、（中）、（下）」（東京都立大学人文学報 No.78, No.91, No.98）とともに、筆者の名古屋大学大学院文学研究科言語学専攻課程における修士論文の一部をなすものである。」とある。

中村：1982年3月に学士入学の際の面接試験で初めてお目にかかりました。無言の時間が長い面接だったという印象です。前年の1981年に仏文の学生だった私は菊田正信先生の授業に出ていました。魯迅の『阿Q正伝』を読んだのですが、語学専攻の菊田先生が現代文学の作品を読むということで、語学の学生からも文学の学生からも敬遠されたのか、受講生は部外者の私一人ということになりました。毎回1対1ですから、私が予習してきたところまでで授業が終わるのですが、表現や語法を考えながらゆっくりと進む優雅な授業でした。その際、先生に来年度から中文で勉強したいと相談しました。音韻に興味があるというと、「それならケーヤさんだな」と一言。私にはその「ケーヤさん」が名字なのか名前なのかもわからず、ひょっとして外国人かなどと思ったものです。学士入学の面接で初めて本人に会い、この人が「ケーヤさん」かと。菊田先生の言い方から何となく「ケーヤさん」がその分野では有名な人らしいと思っていたのですが、単に趣味として勉強しようと思っていた私は特に調べたりしませんでした。面接で先生は、時折ほんのかすかに微笑み（かと疑われる表情）を浮かべて、「そうですか」とか「有坂秀世は読みましたか」と短い言葉を発するのみです。その厳粛なたたずまいに、これは本気で勉強しなければいけないと、自然にそういう気持ちになりました。

吉池：1982年というと「前史—石塚龍麿から有坂秀世まで—」を書いた翌年ですね。

中村：そうです。先生はまだ40代半ばで、最も脂ののった時期だったと言ってよいかも知れません。「前史—石塚龍麿から有坂秀世まで—」（『中国語学』228、1981年）を発表した同じ年に「「字母」という名称をめぐって」（『日本中国學會報』33、1981年）も書いています。中文に入ってすぐにこの二つの論文の抜刷を先生から頂いたこともあって、私にとっては二つとも非常に印象の深い論文です。

吉池：どちらも「物事の沿革の解明」と言える論文ですね。

中村：特に「「字母」という名称をめぐって」は漢訳仏典に「alphabet」の意味で用いられていた「字母」という語が、いかにして漢語音韻学における「三十六字母」のような用法を得たかを問題にしたもので、まさしく「沿革の解明」に他なりません。膨大な使用例を引用しつつ、唐代の智廣『悉曇字記』に「體文 亦曰字母」とあるのがどうやら後の三十六字母の用法に連なると考えています。「體文」とは梵字の基本子音（aを含む）のことですが、面白いのはそれまでの悉曇学の研究者がこの部分を「(摩多 [=母音]のみならず) 體文もまた字母という」と解釈していたらしいことです。慶谷先生は「體文は字母ともいう」と読むべきだとして、『悉曇字記』のこの部分では「字母」が「alphabet」の意味ではなく「子音」の意味で用いられていることを重視しています。それが後に漢語の声母を表す用法に発展していくというわけです。膨大な資料を丹念に読み込んだ成果と言えます。

吉池：漢訳仏典に詳しいのは慶谷先生の師匠である水谷真成氏の薫陶の賜物でしょうが、慶谷先生ご自身のなかにもインドに心を惹かれる素地があったような気がします。

中村：そうですね。論文としてインド学に深く関わったものは多くはないのですが、インド学あるいはインドという地への興味は何となく我々にも感じられました。この頃に『珠穆朗玛峰・世界最高峰的奇迹』（江荻・葉永烈 [著]、慶谷壽信 [編]、駿河台出版社、1984年）という中国語の中級用テキストを出版しているのもインド周辺への関心からでしょう。また同じ頃でしたか、風間喜代三先生の授業で法華経（サンスクリット語）を読んだ時にも、嬉々として学生と一緒に受講していました。最初期の論文「一仮説」で蒙古字韻を利用しつつ入声韻尾消失の過程を考察したのも、もともとは梵字の流れを引くパスパ文字への興味から始まったというのは穿った見方でしょうか。

吉池：風間先生の授業の時期は、1985年です。講義の準備として諸写本を校合したケルン・南条本を購入することになり、私も一冊注文しました。もともと、その本は、今に至るまで書棚のなかで眠り続けています。それから、蒙古字韻研究の経緯ですが、「一仮説」の附記によると、1961年に水谷先生のレポートとして蒙古字韻の整理にあたったとあるので、名古屋大学の修士2年の1月から3月の間もしくは博士1年の4月から12月の間に蒙古字韻の整理にあたったこととなります。これは修士論文（敦煌から出土した音韻資料を研究したもの）を提出した後です。なぜ蒙古字韻を資料としたのかという点については分からないのですが、ご指摘のように「梵字の流れを引くパスパ文字」が話題となり蒙古字韻を資料として扱ったという可能性はありますね。